

可憐なヒノエ馬の十七の娘だ。

僕の傍には十八の女が坐つてゐる。

僕は一入泣いた。涙はメガネを曇らして、ポトポト膝の上へ落ちた。

僕は其處に横になつて了つた。

ハタを織るのに昔は梭を手で投げ入れたたり、受けとつたりしてゐたものだ。複雑な感情の糸を

通した梭が、僕の胸中を縫ひ破つた。

奥から中平文子のお母さんも、イボンヌを負ぶつて出て来て、『何處かお悪るいんですか』と言

ふ。

『先生に逢ひたがつて被居しやつたのにお留守だつたので、ガツカリなさつたのでせう』久子が辯じてくれる。

枕を持つて来て貰つたり、毛布を被せて貰つたりして、僕は其の玄關の間に仰向けにねたのだつた。

心の重心が動揺して熱が出て來た。